

報告：『白雲和尚語録』の三つのテキストを通じてみた白雲景閑の伝記について

パリ・シテ大学韓国学教授
ブルニュトンヤニック



白雲景閑（一二九八―一三七四）は、直指の編集者として名高い禪師であり、その語録（白雲和尚語録、一三七八）は高麗時代の貴重な記録の一つである。彼は「麗末三師」の一人としても知られ、活動のピークは恭愍王の治世（一二三二―一三七四）

次に分析するテキストは、一三五四年に石屋が入籍した後、彼の弟子である禪人法眼が湖洲の霞霧山から高麗へ渡り、海州の安国寺に残した辞世頌である。辞世頌は一見、死に際の詩のように思えるが、詳しく見ると、伝法偈と同じ性質があると考えられる。白雲もそのように理解していたため、彼を石屋の高麗人の弟子と見なすことができる。さらに、太古普愚（一二〇二―一三八一）が、おそらく一三五六年に彼を恭愍王の師とした頃に書いた手紙を読むと、白雲が自分を石屋の弟子と認識していることが明確にわかる。しかし、一四世紀末の石屋の塔碑文には、太古だけが唯一の高麗人弟子だと明記されている。

最後に、一三六五年に白雲が恭愍王に送った神光寺住持職を辞任する意向を示した手紙である。白雲は出家後、世俗の利益を避け、僧侶の活動に専念し、官職を何度も辞退した。この態度が、彼の歴史上の記録を減少させ、後世における影響力を弱めた。彼が政治的な立場を避けた理由としては、開京の朝政で辛純がもたらした悪影響、例えば高僧のような太古を排斥し、脅迫する行為などが考えられる。

に重なる。しかし、白雲に関する詳細な伝記や記録は残されておらず、弟子たちが直指や語録を編纂する際も、彼の人生についてはほとんど触られていない。そこで、『白雲和尚語録』の中から三つの短いテキストを通して、白雲和尚の生涯を垣間見ようを試みた。

まず、白雲が「白雲」という道号を授かったことに感謝する詩（謝詩）を取り上げる。語録に掲載されている多くの文は、白雲が元国に赴いた時期や、一三五二年の帰国後に対応している。そのため、一三五一年以前、具体的には『高麗史』で一三四六年に松都での雨乞いの儀式を任された白雲という僧侶や、長谷寺の金銅葉師如来坐像の腹藏発願文に記された親伝師白雲が彼を指すという説は説得力に欠ける。謝詩の中の「青山父」は、石屋禪師を指していると解釈できる。

プロフィール

●パリ第七大学と韓国学中央研究院で学び、高麗時代の仏教と国家の関係を中心に研究を行う。「直指・白雲語録」のフランス語の翻訳で知られる。二〇〇三年コレージュ・ド・フランス韓国研究センター長に就任。二〇一〇年から二〇二〇年まで初のフランス語圏韓国学国際ネットワークを主宰し、二〇一六年より歴史学百科事典（アフリカ、アメリカ、アジア）プロジェクトのコーディネーターの一人としても活躍している。